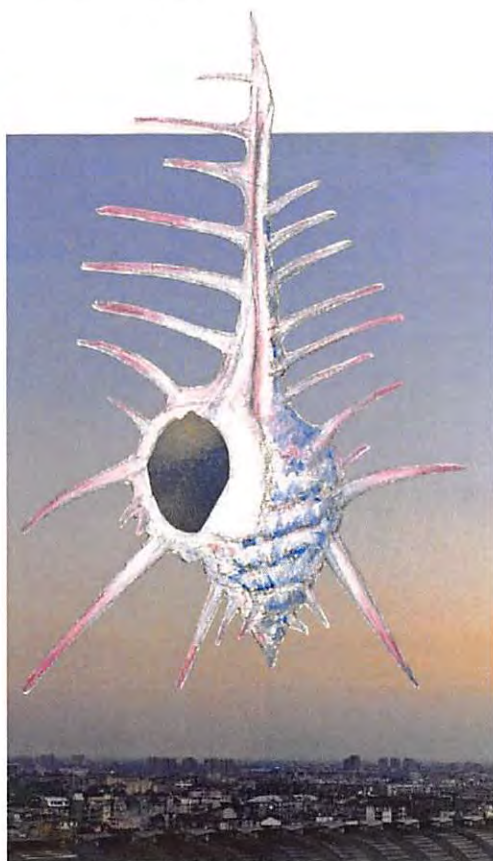


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020. 8



令和2年8月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第8号

No.747

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二〇年 八月号 (通巻七四七号)

◇今月の二十首詠……里山に遊ぶ

田中純子 2

■作品

△

虎谷信子・田土才恵他

4

A

辰巳洋子他

20

B

武田幸子他

50

C

田端典子他

62

A

安部 律他

76

■オリープ集

島根美智子・新明彰子

40

◇今月の二人

大下陽志江・平山一子

16

■高橋啓子歌集『自己増殖』批評

自己の内部を見つめる歌集

36

自己を見つめる眼

三井 修
吉沢あけみ

香川進の生きものの歌

22

田土成彦

15

香川進・その周辺

久我田鶴子

15

私と短歌との出会い (216)

富田鈴子

19

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】

木村文字

46

■遊覧寄港

〈糸屑にまみれ〉

蒲原清美

48

■歌壇月旦

結社誌の編集後記から

磯田ひさ子

49

■六月号作品批評

A……………浜谷久子・横田敏子

68

玉井綾子・須川千恵香

B……………中山真弓・茂木 斌

C……………滝田靖子

オリープ集……もとむらしげと

今月の二人・作品評

久我田鶴子

18

最近の歌誌より

〔編集部〕

67

送風塔

中村博子・土井谷恭子

93

クリップ……………95

神田通信……………96

〈写真・歌合わせ〉作品募集……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kyuga

里山に遊ぶ

田中 純子

遠景の山ひだまでも愛おしいアップダウンに耐えし縦走

里山に芽吹き匂い漂えるゲーム依存の子供ら出で来よ

外出の自粛は山まで奪うまいコロナウイルス逃れ登り来

プリウスがコロナがどうのと言いなながら笑いが絶えぬ里山歩き

定刻に歩き始めておはようからコンニチワに変わる八合目あたり

オンツツジ、ミツバツツジ競い咲き二人歩きの里山笑う

入社して初の休みをばあちゃんの里山歩きに付き合いくれる

山歩きが好きで良かった憂い忘れ山が呼んでる花が待ってる

昭和二十二年生まれ。

桜の会所所員。

歌集に「夢新しく」がある。

スカンポを手折らばポンと心地よき音の響けり今が食べごろ

スカンポの皮むきあく抜き手間ひまをかけし一品小鉢に盛りぬ

幼き日スカンポの歌大声で歌詞の意味など解らぬままに

里山に季節の移ろい感じつつ日々のメンタル保たれている

いにしえの誰が名付けしか母子草寄り添いながら日の色に咲く

名も知らぬ赤しろの青の小花咲き踏まれても立つしなやかさ持つ

散り敷けるオンツツジの赤ふみ行けば足取り軽し 初夏へと向かう

ちちははの看取りはいつも弟へ我は他人の後見人に

縁ありて後見人になりてより歌詞カード携え媼を訪いぬ

はるかなる家族総出の取り入れは幼心に充実を知る

草陰に白鳥羽を休めおり北へ旅立つ日の近からん

コロナ禍で図書館も行けず見渡せば家に多々あり眠る文庫本

作品 A

虎谷信子

花選はな

・伴

朝とく蓮咲く音 きかばやと、ここなる池に しやがみ待ちるる
 「ポワンポワン」蓮咲く音まきにしぬかそけくかそけく水面をわたる
 うす紅の花びら開く 音なるや。水面をわたり しじまに消ゆる
 蓮池の 広葉ゆたけし。花つゆは まどかに落ちてたまゆら動く
 抽んづる蓮の蕾 透きとほる紅色もちて、凜と たちたり
 大輪の白き蓮は 今正に ひらきたるらし。遠きまぼろし
 池の端そぞろ歩みぬ。花選 四ヶ日を経て、咲くと聞きとむ

田土才恵

勝ちどき

・宙

鈴生りのゆすらうめすべて平らげて鳥三羽の躰に勝ちどき
 赤き実を食べ尽くしたる鳥ともコロナの春は長け行く五月
 鉢内に目覚めし球根コロナ禍のほったらかしにも負けず芽を出す
 這い上り天を指している蔓の先羨しと思ひ恐ろしと思ふ
 一斉に春絡めとるむかごの蔓触れたるものに巻きつき活きる
 黄の花のいまだ幼きゴーヤにも光みなぎれコロナに負けぬと
 胡瓜の芽双葉いとしむプランターに水切らずまじ今夏の課題

高尾恭子

春愁

・大

嫌われてナガミヒナゲシ舗装路のひび割れに咲くひたすらに咲く
 百年を待てば根づくやこの園に ナガミヒナゲシ刈りとられたり
 水彩の絵の具を溶きて踊りだす薄くれないの雛罌粟の群れ
 休園の柵の彼方を薔薇あかく断頭台に立つ王妃なれ
 しあわせの鐘と名づけて打ち鳴らす胸処あふるる朝の溜め息
 入りつ日にレナウン娘をおどらせて波の何処や方舟の影
 校庭の児らの渦まく声はずむ ふた月おくれの春の追い風

高津砂千子

水無月

・風

ひんがしの空にましろき望月のぼっかり浮かぶ水無月八日
 朝つゆにしっとりせしる姫女菟箱根の大会よみがえりくる
 久びさの会いぞうれしき紫陽花の白き花まりふたつただき
 青梅を水に浸せば友どちの澄みし声音の聞こえくるはや
 お福分けのアジの七匹風干しにすべく時かけ捌きてゆくも
 公園の藤にあまたの莢垂れてまごうことなき梅雨入り近し
 夏日なるきょうは素麺庭に摘む紫蘇ネギそしてつゆくさの花

滝田靖子 雨

・新

乳癌の話してゐる真夜中の遠い電話の向かうにも雨
屋根を打つ雨音に包まれて眠る身体を小さく小さく丸めて
寝返りを繰り返すだけの真夜中の雨はトタンの屋根打つばかり
真夜中の雨さざあど降り注ぎ冷たい胸をまた冷やしていく
雨はかく降り注ぐもの真夜中の冷たいわたしを殴るみたいに
屋根を打つ雨音をただ聞いてゐる起きるには少し早い午前五時
早暁の目覚めは老化のひとつだと言はれさうだな アンニュイ

竹下妙子 初夏

・霧

田の畦の田の神かさあに野の花の小さきひと枝挿してをろがむ
青紫蘇のしげれる中にくれなるの掲げてやさし日日草の花
杉群を住処すまがとなせる鶯の初夏に入りてひねもす鳴けり
乳牛の豊かなる腹照らしるる夕映なりしわれも染まらむ
夕顔の真白く清しすが蓄いまほつれむとして何思はしむ
野の草の青み初めたる堤防をゆきて暫くひとりありたし
わだかまり解けえぬままに別れ来て夜のしくれに背な濡らしゆく

田土成彦 玉垣

・宙

産土の玉堤に残る父の名よ令和に受け継ぐこともなからむ
堤防の斜面に腹をするやうに燕は五月の風を縫ひ行く
石段の五十いくつを登り終へ堤に立てば初夏の風あり
幼少の記憶は多く垂乳根の母に繋がるせつなきまでに
伸び足りし葦の狭間をゆく水が追憶のごときさざ波をたつ
窓少し開けて眠れば六月の風はほどよき涼をつれ来る
淀川の美味しい水を少しのみ眠らむよ朝の来るを信じて

玉井綾子 裸足

・羊

緊急事態宣言中の明日から出社せよとう カレーを作る
裸足にて過ごす終日足裏に数多の汗腺開くを知りぬ
緊急事態宣言中に出社して居間にいる吾がわれに付き来る
階下での声にしゃくりが増えてきて父母の言い合いが始まるを知る
電動のポット沸く音沸点に達して戻る外出自粛
出社指示に開けるクロゼット冬物のスーツが初夏の息に苦しむ
子の寝息 音の大きく寝室に寄せては返す浜辺あらわる

中島央子 籠る(二)

・森

ウィルスに束縛されて気付かざる歩数乏しき脚の老化を
期限切れせまる非常食ラーメンを事なく生きゐる昼を啜りぬ
買物の袋にしのはずボールペン「コロナ」の脅威に身すぎ世すぎや
桃ゼリー茶菓子に友と小半時拘束に萎ゆる心よせ合ふ
ひろがれる「コロナ」禍ゆゑにねばならぬ商店街の休業広告
首都高の大川越えて新宿へ渋滞しらずは自粛の五月
小花散る布地のマスク縫ふ娘ヒマつぶし作法拘束の日を

中島義雄 コロナの月

・岡

ひむがしに古代のままの月出でて新型コロナの夜が森しい
月ありて水美しく澄む夜も新型コロナの関の声する
ゆく春の思ひつれなく今日もまた新型コロナの死者増えてゆく
遠雷は形見の虹を置きて去りコロナウィルスの影を残しぬ
病院へ命乞ひに行く道に逢ふ一括して死に赴く豚ら
「猪の肉要らんか」と隣人が聞きにくる昨日畑を荒らしし猪か
我がもしコロナに死なばと子に言はむ時に餌を待つ巢燕騒ぐ

永塚節子 歳月 銀

うたびとの歌に誘われ見上げおり花房長きむらさきの藤
すめらぎの御感の栄に浴したるむらさきの藤百年を経つ
笑まいつつコーヒーミルを回しいし父の仕草の不意に立ちくる
性に似て好みし豆はマンデリン苦み酸味の少なきその味
長き長き時間過ぎたり食器棚にコーヒーミルは使われぬまま
こしかたの仕事のなごり紙箱にちびた鉛筆ぞろりと並ぶ
つねひごろ積み重ねたる褒美なり医師は笑顔に今日が一番

菽 葉子 菖蒲湯 銀

何処より刈りきし菖蒲軒にかけ菖蒲湯たてくれし父を偲びぬ
今年の五月は娘とふたり菖蒲湯たてることも忘れて
「歌作れないようだから」短歌にかかわる本えりくれし
二階から降りきて「只今」コロナゆえ在宅勤務の娘をまち夕餉
「バスを待つとき使って」とハンディファンなるもの娘は買いきたり
夜おそく新任地より母の日に息子の電話あり声にほっとする
三方に家建ちてより中庭にカンムリドリが遊びにこない

白子 れい 籠もる日々 洛

さみどりの滴る石段登り切りコロナ消ゆるを朝あさ祈る
新緑にふくらむころ抱きつつ体操なし得る今日の幸せ
体操を終えて帰りの西の空しら雲とまがう半月泛ぶ
若みどり濃みどりふか深噴き出づる里山迫り来あさの小路に
独り居を案じ電話をはた野菜・花持ちくるる友らに感謝
西日背に庭の草抜き日課とすコロナに閉ざされる吾の日々
籠もる日々々と対峙なすに悔い多し彼の日この時かえり来らず

ばばりようこ 時間どろぼう 鹿

留守番のでんわは鶯うぐいすの声ひろい里山の伝言ひなびて伝えた
うぐいすは優雅に鳴きて蛙はも騒ぎ立て鳴き「コロナ」は威嚇
笑顔にて写りいたる七人そのなかの三人いまや彼岸のおひと
天窓にまろく満ちたる月のぞく令和二年め皁月の夜半の
病みたれば時間どろぼうの思うつぼ二十四時間たつぷり盗らるる
自らをいとおしむ日よかなしくて等身大を鏡にうつす
庭に咲くよいまち草よ誰を待つ月夜にわれも立ちて待ちわぶ

浜谷 久子 遅霜 地

土手道を渡り切れずに干からびる蚯蚓は護岸工事を這い出し
ブロックに土と芝生をのせていく護岸工事の距離の着着
馬鈴薯の葉先のあかく傷みいて遅霜の日の痕跡とどめる
花の咲き種草も生いる春の野を朝風ひんやり揺らして過ぎる
いっせいに田の耕されさくさくとはなやぐ土の水待つばかり
菜の花の種のはじける畑はいま夏の野菜の植え付けととのう
雲を染め山昇りくる太陽の春の面輪の混沌として

浜本 芙美 祈りのかたち 夢

秋空に祭り太鼓の音さえて列島の災い吹き飛ばすごと
朝毎に買い物に行つてくれる夫を今朝も門扉をあけて見送る
心弱りし弟と交わしし双の手を祈りの象に胸に置きたり
友を呼び山のねぐらに帰りゆくカラスを残照の空に見守る
声をあげ群れとなりつつ山辺さすカラスの群れに心のせゆく
赤き赤き花シクラメン冬の花めぐりの花を統べて咲きいる
庭隅にホタル草ひと花見しからにわれのさびしき秋のはじまり

檜垣美保子

木洩れ日

・昀

藤森巳行

小泉

・銀

風にのりきこゆる雅楽の笙の音よ網戸に羽毛とどまりふるう
あけはなつ窓、窓、窓この六月の真昼の音を腑分けしており
ひかり降る樺木立をジグザグにおさなごは膝まで草に埋もれて
青空に放射している六月の樺の枝とその根の果てと
あらわなる樺の太き根踏みこえて木洩れ日の道次の橋まで
どこからを根と呼ぶべきやおかまいなく幹をくだり気根を這う蟻
雨ふらず雨まだふらず裏庭に蛙鳴く声雨のはじまり

福田庸子

滲む春

・今

船田清子

背戸の細道

・天

越冬の明けて玻璃戸に脚伸ばす筈（ま）亀虫と対面の朝
間を取らず啼く画眉鳥のかん高き領空領海侵犯国の鳥
鶯の声ひと啼きはしつとりと若きみどりにしみてゆくなり
尾羽振る音たて土を突く雉子と眼合はせて耕す畑
この年も願ふ相手は見つからず我が畑に来て土を啄む
胸羽は虹色に映ゆ堂堂と怖れぬ姿我が見惚るる
「とか」「みたいな」「かんじ」断定を嫌ふ人らのやさしさなのか

藤田美智子

奈津子

・新

牧雄彦

川鶴

・大

面に映る雲を伸ばしたり縮めたり田植糸を待てる雲は遊べり
奈津子への返信六年ぶりに書く掛ける言葉に重さの取れて
使はずじまひの花火のセット出できたり心が少し湿り気をもつ
しづかなる君の寝息を盗む夜の闇に艶めく柿の若葉は
『アーモンド』の最後の頁は捲らずに朝を待ちたり闇見つめつつ
怒りより悲しみが先に湧く君の傷つきやすさに降る春の雨
〈前に進む〉とは人を置きてもゆくことか木木の緑の日と深まる

柔道は二段を取ったが恋愛は白帯のまま喜寿を迎へる
コロナ禍で芸術文化も沈みがち今こそ熱く短歌を語れ
全人類の生き方を問ふかコロナ禍は己のみに生きてならぬ
外出を控へることが人の命守ることなり変な時代だ
義理人情大事に生きる私は昭和の男昭和の歌詠む
「小泉」母のふる里「小泉」小さい頃からその字が読めた
トネルを二つ越えれば「小泉」何度か行つた母のふる里
天界の香を放ちぬし泰山木も半世紀経て枯れ枯れ老いぬ
どくだみの白き花叢によみがへる少女の頃の背戸の細道
青白く甘きいちじく塀を攀ぢ籠一ぱいにもぎし戦ゆ
七十余年経てスーパ―に並びたる大きく黒き実味なく高値
令和の子一人遊びを知らぬにや穂つき、石蹴りほらやつてみな
雨を得て南天の葉は紅から青へ白き玉芽の花穂も伸びて
朝じめるみどりの葉に座し白つめ草の花輪を編まむ空地もあらな
生徒らの影の失せたる校庭を砂巻き上げて春の風吹く
マスクして湿る口もとくちびるを前に斜めに突き出してみる
手を洗へ手を洗へと繰り返すニンゲンの手はまこと恐ろし
水の面をしづかに流るる花いかだ川鶴が見つめて岩に動かず
妖怪と身をくねらせてくちなはが春の町川泳ぎゆきけり
ガマ蛙太きひとこゑそののちは水音のみに川は夕づく
花びらの散り敷く道を歩みゆくかの日の道はここに続くか

松浦禎子 忘るまじ 羊

シベリアンハスキー犬の銀次君息子家族の一員となる
飼い主にならないで胃腸弱しとぞ神経質にならずともいいよ
銀ちゃんは愛されているから目がきれいわたしも孫のように思いて
竹林の落葉の道をとびあるく動画朝夕自粛の日々に
この年のおおごととなりしコロナ禍とこの小犬とのえにし忘るまじ
コロナ禍に重症老人多きとぞことば流れ来耳より流す
コロナ禍に人影失せしサン・マルコ広場のカフェも夢のうたかた

松永智子 鴉 嵐

窓ちかく声なく鴉飛びゆけり不意にしゆけりただ一羽なり
あかときの窓よぎりたるからす一羽声たてずして音なく飛び去る
声たてぬままなる鴉一羽なりこの朝空をいつくゆくくらむ
あさやけの空へ飛び去り声高く鳴きしや鴉空ふかければ
窓ちかく声なくすいと飛びゆける鴉一羽のそののちしらす
ものいはぬひとひの終り音のなく昏れゆく空のとほくし高し
五月の終りの日なり太陽の沈みゆくみる燃えながらなり

三浦好博 辞退します 銚

ウイルスは身をも心も苛むる地球はこんなに狭かつたのだ
我もまた敵はコロナの筈なのに感染死者また感染者捜し
病との闘ひそして差別との闘ひが待つ感染したら
我もまた「欲しがりません勝つまでは」コロナ禍の正義振りかざすのか
人と会はず何か忘れてゐるやうで雛粟粟の花の盛りも過ぎて
命かけ最前線で働くに偏見が待つ看護師の君
重症でも高齢者吾は辞退します人工呼吸器逼迫せしとき

三木まり 初夏 鼻

秘め事のように息を吐くあさり厨の窓辺の光は夏いろ
早朝の厨ひそかな音がする浅蜩のため息つきづきぶくり
次々とあさがりが息を吐く朝遠くかすかに鳥鳴き交わす
早朝の雲の向こうに雲雀鳴く生き急ぐように激しく途切れず
早朝の雲の隙より光差し一瞬きらめくヒバリ小さく
その姿見えない高みに鳴く雲雀ここにいるよ、生きているよと
壊された巢の近く飛ぶ親つばめ一昨日、昨日、今日もまだなお

宮本靖彦 マスクなき人 凌

雨水タンクの修繕了へて五月雨のさらさら溜る水音のよし
宵寝して子の刻二つ 目の冴えて学びし干支の刻をたのしむ
滔滔と堰落ち流るる千里川先師もここに足止めしか
鳥集ふ大き柿の木ありし家跡地に三軒けばけばしきが建つ
夏蒲団カバーに留めゆく老婆の手の細りたり梅雨入りちかし
解除後もマスクなき人車中になしやれば出来るのだ大阪人
五月晴れかがやく朝禁とけてグランドゴルフへ友等の笑顔

三好聖二 棕鳥 伊

冬野菜洗い続けししるしかな十指の先に輝あらわれる
遠くにて鳴き声がする木の上のかわずの声に答えるように
おぞましき夢に庄されて目覚めれば天井の染み安堵をこぼす
魚の身と骨とを奇麗に分けて食う私以外の家族はみんな
ゲラ刷りに猫らが座り校正を已む無く止めて腕を組みたり
親族が集まることは既になく遠く霞める車座の息
棕鳥は我との距離を測るらし畑の隅に煙草吸いつつ

御代田澄江

籠り居の日々

・茨

籠り居の再読本大江健三郎「言葉によって」は言葉激烈
胸に書かれし（九条を語らう）に共鳴しTシャツ買ひき世界会議時
音もなく新型コロナ広がりでその禍医療者介護者に及ぶ
サイン不要とコロナを避けて配達員より届けるカーネーションに
娘がくれし手作りマスクあたたかし庭に出づるも放さず掛けぬ
みどり眩しき庭中にして花桃の小さき実の見ゆ葉にかくれつつ
かすみ草地味なるも他を引き立つる花 見えつ隠れつつ存在示す

茂木

斌

手作りマスク

・埼

秋あかねレッドドラゴンフライとは日本語のなんと美しきこと
牛井の大盛りお替はりする声の若者二人吉野屋の昼
グアイソーに探すゴム紐売切れに妻の手作りマスク足踏み
妻の手に出来しマスクのいの一 番離れ住む息子の許へ送らる
「お父さんのはまだよ」と妻のつれなくて手作りマスク後へ持ち越し
令和二年悲しい春となりにつけり選抜中止相撲は無観客
田植を待つ田んぼの畦のひとつまに黄花アイリス燦と明るし

もとむらしげと

テスト

・そ

ときおりに顔をあくれば頬赤し力を込めて考うる子は
あきらむる如くに外を眺めて終了近くまた書きはじむ
音たてて消しゴムを使いし子のペンは暫し走りて再び泥む
紙をめくりペンを走らす音のみに踏切の音やけに響きぬ
答案に生徒の顔の浮かびきて奮起せよとて×をつけゆく
「頑張ります」と誓いし生徒の答案は二十三点見る影もなし
答案を返しゆくととき一瞬に沈みし生徒を目で追いにけり

八乙女由朗

白鳥事件 (3)

・柴

ねらい撃ちし弾ははずれて舟べりをかすめたるのみ川渡り終う
船岡城家臣のなしし非行為を官軍兵は上司に告げき
新政府参謀が怒りて責求め犯人逮捕の敕命出せり
領主なる柴田家中務意広は二人を捕らうるも玉蔵逃亡す
玉蔵の身代わりとして義児なる文治を斬首し首差し出せり
その責が藩主に及ぶを恐れたる藩中樞は切腹迫れり
柴田意広切腹して果つ三十七叔父が介錯なせりと伝う

山下雅子

天窓

・習

完熟のセミノールのしたたりよコロナに喘ぐ身にしみ透る
へそありのあんばん提げて歩みしは昭和の銀座マントの父と
どせうの文字ま白くおどろし駒形の暖簾ありありと呷ゆる藍色
夜をこめて降りしや滴きさらきと葉ざくらの道さみどり匂う
しとしとと若葉をしっとり濡らす雨静かに静かに語りかけくる
日を追うて若葉のみどり深みつつそこはかとなく季は移れり
此処のみに降り出す雨かと思上りたり夜の静寂の天窓を打つ

山野幸司

麦

・沖

麦の上ひばりは歌う空の青御身もわれも洗われていん
国道の分け行く麦の畑続く五月の光胸に抱けり
睡蓮の横に顔出す赤メダカ遊ぶ石臼どっかと座る
よれよれの服がお似合い朝の陽に林の緑深く色付く
こっそりとドアを開ければどっと寄る幼き孫の歓声起こる
「ここ揺いて」孫の寝そべるリビングに時間は止まり暮が降り行く
深々と老人頭下げ過ぎるいつもの散歩淡き影引き

横田敏子

鳥を待つ

・福

水替えてパン屑撒きて鳥を待つコロナ忘れる日本晴れなり
 この空はきみのものだよ初蝶の慣れぬ飛翔をしばし目に追う
 ポストへの通り道なる薔薇の家往きに帰りに香を楽しめり
 梅雨前の暑さに心乾く午後蒸発してゆくわが歌ごころ
 右の目がまた赤くなり痛み出す眼底疲労の休めのサイン
 旨そうな南瓜並びて即決まる今宵のメニューはカボチャのカレー
 夕焼けは昨日も今日も燃ゆるごとコロナウイルスまだ収まらず

吉永惟昭

北海旅情

・熊

遠き日の北海旅情かずかずを残し置かなと筆執る范種
 ソ連より駈けつけくれし後輩の塩強き鮭上川に食ぶ
 大自然満喫したる知床の釣果も楽し漁師のいたわり
 魚煮る鍋貸しけれし湧別の食堂おかみ「ショウユも使えや」
 シャクシャイン惚ぶ静内相部屋のアイヌ湯宿の旅情に浸る
 まだ早きメイクインきょうさん掘りくれし農家うれしきなべて広大
 札幌のビール苑にて母饗歌を合唱なせるを許しし客はも

朝井恭子

古里

・森

セピア色の思い出たどる母の忌に若き僧侶の説教永し
 父母の墓詣で来て弟と肩並め歩む早春の町を
 合併を拒みたる町さびれしと古里の友電話になげく
 歌会終えくつろぐ我に弟の電話みじかく従兄弟の死告ぐ
 出棺のクラクシヨンの音過疎の町の静寂やぶり真昼を長し
 迷い犬探す手書きのポスターの文字滲ませて春の雨ふる
 抜きん出る細き花茎に丸き頭をのせ葱坊主たずきなく立つ

磯田ひさ子

靴履くやうに

・森

ウイルスを乗せて神奈川県沖に令和二年の白船来航
 通年をマスクをつける御触れなりうす暗がりの未来はじまる
 ほやほやの日本のマナー外出は靴履くやうにマスクをつけて
 放射能 コロナウイルス衣食足りつまらなきこと増ゆる日本
 自宅籠城つづくわれへの救援や うるひ 穂の芽 信濃のみどり
 病みし児が夏もマスクをしてゐたり水玉模様の切なかりしよ
 窮屈はいたしかたなし戦争の時代を生きし人を思へば

市原志郎

蝶

・萬

二つ影落して庭を横切りぬ蝶は初夏を持ちて来るなり
 コロナあまたテレビを独占する毎日今日も暮れて行くのみにして
 閉店のニュースばかり見てようやく動き出すものがありたり
 ヘリコプターより降りくる大統領テレビはコロナの事を映さず
 子は勤務が家になりたり生真面目にパソコンの前を離れることなし
 今年来ぬ燕恋しやカラス故と怒りを持ちて鳴き声を聞く
 梅雨近き空より吹ける朝の風ほんわりとして窓の外を行く

市原やよひ

電話

・萬

覚えなき電話番号確かめ居る時に留守電から突如懐かしき声
 何年ぶりのかの友の電話はその夫の認知症を告げる声なり淋し
 コロナ禍は面会さえもままならずと友への言葉一瞬つまる
 慰めにならねど夫を介護すること話して暫し時間を埋める
 思い出を話し始めてあの頃の明るき声が戻り始める
 壊れたる巣には燕帰り来ず番人の如くカラスが見ており
 麦秋も青き田もなき地に住みて只管恋し青きふるさと

大浪美雪

白花匂う

・森

ムスカリに始まる春は大蔓穂、十二単と紫ばかり
 高波のくだける形にタツナミソウ薄紫の花をかかげる
 言われるれば紫ばかりの庭の中ナニワノイバラの白花匂う
 澄み通る朝の光に房垂らす藤の花陰少しく重し
 との曇る朝の庭に藤の花己が香まといあるがままなり
 二年毎に花茎を持つというポロネギの赤紫の小さきふくらみ
 紫の苞を開きてポロネギの小さき花々十余り五つ

奥田陽子

五月

・羊

かすかなる香りは五月筋取りし絹莢を手に移さんとして
 マスク取り深呼吸する木木のなか日の照るあたり新芽萌えいる
 大き木の根もとに額を押ししがもういいかいと児の駆けてゆく
 おおき木のすっぽり隠す肩ありて風さやさやと吹き過ぎてゆく
 人声のまばらなる日は鳴き交わし姿みせつつわたりゆく鳥
 こまやかな縁かさなる円天へ枝より枝へ鳥の飛び立つ
 遠まわりの足重からず幼な児の声届きくる園のみどりに

小野雅子

雑草

・羊

高原のお花畑のごとくにも芝生を埋むる雑草の花
 白、黄、紅ひとつひとつは愛らしき花なり群れて芝生を占むる
 「雑草」はないと言はれし天皇をふと思ひたりけふ昭和の日
 黄の花は陽が照れば咲き曇る日は閉ちてみどりの芝生あるのみ
 運動会のざわめきもこの春はなし秋への延期これもなくなる
 母の母スペイン風邪に死にしろふ百年前にはかに近し
 季節はづれの気候に必ず名のありて若葉寒なりスカーフを巻く

神田鈴子

薔薇

・大

絶え間なくSNSを送りくる休校中の孫の退屈
 将来はパテシエ目指すとふ十歳の孫と焼きたりキャラメル・クッキー
 休校中母を手伝ひ覚えしか食器洗ひもきちんとなす
 一日の三千歩数を目標にマスク姿と行き交ふ夕へ
 青葉噴く野道をゆけば涼風にしはし忘るるコロナの気配
 緊急事態宣言の解除聞きたれど安らぎ遠く木下闇ゆく
 母の日に子より届きし鉢植糸の薔薇は匂へりくれなる深く

菊地栄子

五日月

・蒼

たっぷりと花ぶさ垂るる馬酔木さえ知る由もなしコロナウイルス
 片側の家影濃ゆき午後道の道人も車もコロナが奪う
 ウイルスを避けてひとりの花見すと友は得意にそそのかし来つ
 締りなき自分を自ら糺す声器具のコードを巻き直したり
 採血さるる血の色暗し紅からずこの身はもしや魔女にあらんか
 五日月はバナナの形熟れている黄の色更に輝かせつつ
 とびとびに芝桜咲く保育園この明るさを阻むものなし

木村文子

銀の化石

・羊

廃線と決まりて春か曾祖父らの拓きし町は点と散らばる
 雪が解け片方だけの手袋が 見なれた春の光景なれど
 駅舎あと花壇となるらしささやかに募金箱に硬貨をおとす
 夏草の茂る線路となるだろろう木陰は広くのびやかならん
 沿線のさまを思いぬクルミの木ありて洞からヒナが巣立ちぬ
 夏の蝶おいかげ夏の子どもらよ線路を越えて駆けてゆくべし
 廃線はまっすぐ町を貫いて輝く銀の化石とならん

草刈十郎

無辺の空

・世

花咲けど花散れどわれらコロナ禍に心ならずも春ごもりなり
 無人駅となりたる今の淋しさよ過去の賑はひ桜は知れり
 コロナ禍に出口の見えぬ人間界悲しげに桜人を見てをり
 コロナ禍に緊急事態自粛して誰はばからぬ朝寝なりけり
 山の上まで建ちたる家の連なりて灯は遠く星へと続く
 海見ゆる若草萌ゆる風にゐて無辺の空の背に対へり
 コロナ禍の終息をただ待つことのいつか祈りへ桐の花咲く

國井節子

ミシン

・春

押入れの奥にねむれる布切れとミシンの出番手作りマスクの
 ひさびさにミシンに油注しやれば機嫌もよろし仕事も捗る
 宇野千代の桜のハンカチ立体のマスクの鼻にはなびら散らせり
 竹の子の胎動のとき藪の中足裏に五感あつめて歩く
 その昔母の作れる柏餅子供の手には余るおほきさ
 芍薬のまろき蒼のふくらみてコロナ休みの児の声いととき
 初夏の生駒の山のとぎすせてひと声聞かせてほしや

河野繁子

えごの花

・雁

マスク縫う布どっさりと送り来し娘の断捨離わが家に留む
 コロナ禍のやわらとけゆく月なかば何げなき幸映にもとどく
 えごの花山法師へと移りつつコロナ禍ややに緊張をとく
 雨の日の骨やすめらし電線に大小の鳥間隔とりて
 はないかだ雌雄うえしに年の経てまみに新し実りを見つく
 葉の中実の成るこれの不思議さに心の満ちてさわやかな朝
 ひとつばたごやさしい光ふりこぼし五月の青空侵されるなく

小西美智子

胡瓜

・大

福島の昨夜は雨か産直の胡瓜が届くしめりを帯びて
 コロナ禍に籠れるわれの門口にありがたきかな産直の品
 「ご用は」とクリーニングを問いくるは週に二回の貴重な会話
 ペチュニアは紅あざやかにひらきいて鉢のふちよりあふれんばかり
 門口のさつきの咲きてこの夏もふとれる蛙の二匹がとび来
 外出自粛解けてもそと出はまならずよにもよりて発熱に伏し
 隣家より今朝女子のはしゃぐ声二カ月後れの入学式の日

小林能子

新型コロナウイルス

・羊

国、郷を称ひ新ウィルス登場す西班牙風邪然り日本脳炎然り
 「入店お断り」に差別なきやとウィルス禍に傷つき恐るる留学生も
 発生源詮議の暇あればこそ新コロナウィルスの猖獗つづく
 亡霊のごとく彷徨ひ地球上に「不幸と教訓」もたらずウィルス
 罰則なき緊急事態宣言も「ヨーロッパや無理」とM嬢は言ふ
 除菌加湿タクシーはマスクの運転手にひと言行き先「市大病院」
 マスクして駆け出す子をやり過ごしユレクサ揺るる風はもう初夏

近藤栄昭

コロナ

・虹

山並みにコロナの結果巡らさん悪さするもの立ち入り禁止
 フルムーン道を間違え逸れてゆけ新型コロナお前は向こうへ
 太き幹細文杉に願かけんコロナよ来るなこちらは大きい
 一人用テントに籠り目を瞑るコロナに耐える何分の一かを
 山道にレンゲツツジの匂い立て触れて行きたいコロナなき道
 マンションに海風吹かせ太平洋新型コロナ沖に飛びゆけ
 この町に烏海山の烈日をコロナを焼いて煙に消さん

近藤芳仙

ローマにて(四)

・信

片言に友の問ひたるイタリア語通じること敬意わきくる
地下鉄のA線・B線乗りゆけば犬も主の足下に伏す

コイン二枚トレヴィの泉に投じたり願ひは真に叶ふだらうか
カエサルカエサルの暗殺されし神殿跡 平和なる世は猫の住処に
真面なる宗教もため身であればヴァチカン市国の入口まぶし
紀元前に生れしイエスの物語西欧絵画にしぼし向き合ふ
めぐりゆく礼拝堂の天井絵「最後の審判」は死出の喚問

坂上直美

コロナ収束

・天

大いなる建物なりしがコロナ禍か通りに面し雑草あまぐさの生う
少しずつかえりつつある日常に見なれた人の顔が見えない
日本が誇るコロナの死者の数少ないけれど少ないけれど
連絡がとれなくなった友だちは亡くなったというコロナウイルス
強く見える強く見せたい強くない女子レスラーは自死を選んだ
Iさんは土産物屋の長女だった自死したという噂はまことか
湖を渡り姉上来たれかし青葉風吹くわれらが京へ

坂出裕子

コロナ

・洛

満開の桜並木の美しけれど見る人もなき コロナウイルス
花は咲き日は照りながらひもすがらコロナの暗き雲がたれこめ
出口なき暗きトンネル行くとき日々が続けるコロナコロナと
ずつしりとコロナを背負ひ戦争のあの日のごとくただに疲るる
友達に会へないことが寂しいとコロナ休暇の孫が電話で
人生のはじめとをはり戦争に黒く塗らるるコロナ戦争
コロナ禍の日に読み返す戦争の日を描きたる『ビルマの堅琴』

佐久間 晟

日乗(三五)

・湾

ひっそりと朝の目覚めのわが前に三つの木の影。何だ俺の指か
庭隅の山茶花の枝から飛び去りし鳥は何鳥ただひっそりと
今頃は山毛櫸の緑も冴える頃思い出多き白神山地
気負いなく生きん思いは多々あれど夢の幾つかまだ捨てきれず
口ごもる事も増えたりただに実行出来ぬことのみ多く
わけも無く生きるに疲れしこの身なれされど生きたし死界は知らず
流行のウイルスに乗りわれも逝くかそのみかただ素直にも見え

佐久間すゑ子

あかり

・湾

京鹿子の花むらの前で目を閉じる長い年月が流れてゆく
すぐ散ってしまう花の咲くのを待っているあふれる思いを語り合いたく
次はどこで語り合いましようなどと花に向かって言いそうになる
夕暮れの庭隅に京鹿子の花が咲くほーっとして雲の様に明る
こんな時はどうなされたのでしょうか。もう聞くすべもなくなりまし
ワイングラスの底の丸みを見つめて。心の丸みを語り合いつつ
もうこれで今日も終わりかあかあかと明かりをつけて夜を待っている

佐藤道子

異変

・甲

三月にさつきの花が咲き初め地球の異変の証のごとく
人の営み途絶えし街の空澄みて桜はしかと輝きてをり
この地球汚すばかりの人類を絶滅せむとかコロナ勢へる
鳥の声繁くなりつつ空澄みぬコロナコロナと街はひそけし
散歩道雀と鳩が渡りゆくコロナにひそけき私の町
しらじらと五月の夜が明けてゆく私の空しき一日のはじまり
真夜深くかすかに響く救急車いかなる思ひの人等乗せゆく

椎名恒治 芝生 橋

グラウンドの芝生青青と茂りたり生徒のこゑいまだ無くして
 さくらの門駆けゆく鬼の声ありて桜の並木青青とせり
 ランドセル負ひたる児童のいづくより走りくるかエレベーターめがけ
 校庭の桜散りランドセル背負ひたる児はエレベーターめがけ
 校庭の若葉の桜散りながら教室は静かなり
 西空に多摩の山山連なれり白雪光る富士をしのぎて
 新型コロナワクチンはいつでできる 中国・米国の十億の目が追ふ

鈴木結志 青春抜き 福

生きすなわち筆にこだわる美意識をおのれのもと古典に学ぶ
 青春の謳歌もあらずいくさ世を経てぞ皺ばむ手に筆を執る
 いくさ飢え青春抜き二天作の五に割り切れぬ老いの皺ばみ
 忍耐は仕事を支うる資本ともうたに計りて筆に綴りぬ
 先人の叡知を借りて大地踏み一步一考たしかめ歩む
 文理芸融合にいとむ人の勞一瞥もなく見過ぐをわびる
 王羲之の書を法帖として目に習い九十余の生き豊かならしむ

関根榮子 大山蓮華 埜

白玉の蕾の時は長くして大山蓮華咲けばはかなし
 山にあれば際立つ白さもこの野にて色褪せ速き花びら惜しむ
 わが庭の酸性度いかに年変り紫陽花の青き色薄れたり
 いつの間に紫色を駆逐してホタルブクロの白花盛る
 潰えたる甲子園の夢よ若き等の無念の涙をテレビは映す
 夕暮の野道の散歩に会いし友ややあり互いにマスクをはずす
 菓籠りは今迄もよと自嘲して老の短き会話の終る

関根和美 「丸谷を拓く」 埜

こもりいる身を時空へとグーグルは果てなく連れ出す目を酷使して
 同姓同名同齡の男性監督の昨秋逝きしをあわれ知りたる
 わが著作のひとつが彼に紛れこみとり消すすべもなきまま過ぎつ
 「関根和美 高山右近」とグーグルに検索なせば新たなひとつ
 古丸谷の色絵に見たる右近またキリシタンの符号解きて明るむ
 美術館の紀要にあれば打診され寄稿なししが難産なりき
 同人誌まがいと蔑され傷つくも自由に書き来し日々を尊ぶ

久我田鶴子 種を蒔く 羊

蒔いてみてと送られ来しは朝顔の種なり四種和洋とりませ
 会へざれば朝顔の種おくりくる師とのつながり四十年
 朝顔の英名モーニンググローリー一日のはじまり祝福しつつ
 かつてわが教室に蒔きし種なるも押しつけがましと言ひし男子
 ほめられた教師にあらざしたばたと型もやぶれずもがいてばかり
 〈教ふるとは別のなにか〉で蒔かれたる種こそおもしろ いづくに芽吹く
 種を蒔きはくむ時間 わたくしに蒔かれし種とわが蒔きし種



香川進の生きものの歌 22 田土 成彦

・人間の行きはかなかれ水中に水母がいくつただようはなや
ぎ 『隠岐』より

水母は空腸動物門に分類され最も原始的な体の構造しか持っていない。いわばゴムまりの一部を指で押し出て出来た空間が空腸であり取り込んだ餌はそこで消化された後また口から吐き出される。華やかに見える多くの触手には毒を含む刺胞があり、なかには相当強烈なものもある。

歌の内容は大変おおきなものだ。「人間の行き」の「行き」は将来とか先行きとかと思われる。ローマクラブの一九七二年の報告では「人口増加や環境汚染などの現在の傾向が続けば、百年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘を鳴らしている。これがいれば当時の社会通念として広く認識されていた。勿論この様な結果に至るにはいくつかの前提があってこの条件は今ではおおかた該当しなくなっている。「行きはかなかれ」はそのような時代の思想を背景とした作者のつぶやきであろう。人類の次に来る地球の覇者はどのような動物になるのかなど、興味本位の想像も聞かれるが当然のこと、昆虫を置いてほかに考えられない。下旬の水母の見た目の華やかに香川先生は人類の栄華や奢りを写し取っておられたのだらう。さて、この水母の最大の天敵はウミガメだということである。

● 香川進・その周辺 ●

一九一八年の母の死 久我田鶴子

母は父と結婚した十六歳からほぼ二年ごとに一人ずつ男女あわせて九人の子を産み、心身共に疲れたのか、当時全国的に流行したインフルエンザで、三十代半ばにて死亡した。
た。〔短歌研究〕一九九三年一〇月号

特集「子供時代の家族白書」に寄せた文章に、香川進は母のことをこのように書いている。母の死は、進九歳のときだった。九人兄弟の六番目に生まれた進だが、妹二人と弟一人は生まれて間もなく死亡したので、大勢の子供の末っ子として可愛がられたという。特に、姉二人は母代わりとなって細々と面倒を見てくれ、母なき児として父からも可愛がられたようだ。

ところで、母の死因は「当時全国的に流行したインフルエンザ」と書かれているが、これはいま新型コロナウイルスと引き合いに出されているスペイン風邪のようだ。

進の母が死んだのは、一九一八年一月一日。スペイン風邪の流行は、一九一八年から一九二〇年である。与謝野晶子や斎藤茂吉も罹り、茂吉にいたってはかなり重篤な肺炎を起こし、そこで死んだ可能性もあったらしい。心身共に弱っていた進の母は、ひとたまりもなくそこで命を落としてしまった。

今から百年前のパンデミックの中で、香川進の母も死んでいったとは。十六歳で結婚し、ほぼ二年ごとに出産して九人の子をもうけ、生まれて間もなくの子を三人も亡くし、その挙句に若くして死んでいった女性が、急に身近に感じられてきた。

今月の二人

あわき光

大下陽志江

鯉のほりみ空に浮かび初孫の義父の自慢でゆうゆう泳ぐ
 木洩れ日のあわき光のさす窓辺わが子の頬にそっと触れみる
 丹精の盆栽壊した子に向かい義父は笑ってけがの心配
 しんしんと雪の降る日に生まれたる双子の声の高らかなりき
 怒られても怖くないよと双子君いたずらをして吾を驚かす
 長男の生れし記念の藤の木は風にふわっとむらさきゆらく
 突然に心臓止まりて病院へ未成年の子 今親となる
 春彼岸夫と二人で参る墓そばにはつくしの頭がのぞく
 八十路越す父母はしっかり手をつなぎ錦帯橋より桜見ている
 実家よりもらいしスズランどんと増えて今年も踊るごと咲く
 入園式迎える孫は凜々しくて希望に満ちた一步踏み出す
 桜咲き車中で花見を楽しもう夫と二人で土堤めぐりゆく
 風に乗れれんげの花は輪になってまるでダンスをしているようだ

歌との出会い

音訳サークルでの高津砂千子さんとの出会いが、短歌を始めるきっかけでした。それまでは俳句・川柳などに興味を持ち、こトばを思い浮かべるのが好きでした。でもなかなか歌にするのは難しく、私には無理かなと思っていました。ある日、音訳の時間などで短歌を作ろうということになりました。拙いうたに先生は手を入れてくださり、表現のちがいに驚きました。

私は裕福ではないですが、愛情を注いでくれた両親のもと、四人兄妹の長女で育ちました。結婚して長男の生まれ後、双子の二男三男が生まれました。大正生まれの敵しい姑と同居し、辛いこともありましたが、実家に帰り両親の顔を見てほっとしたものです。今では、誰もいなくなり、姑も施設に入り、我が家が一番落ちつきます。

私のモットーに、「咲かない花はない」「明日は明日の風が吹く」という言葉があります。苦境に立たされた時、前を向いていこうと自分に言い聞かせてきました。そのような情景を歌に詠み、アルバムに残すことができたらうれしいです。

まだ未熟な私ですが、この歌との出会いを、これからも大切にしたいと思います。

今月の二人

少女の頃

平山

一子 かず

樺太の小学校の空襲跡二回に分けての朝礼なりき

我五歳母と征見送りし二十九歳叔父は戦死す

喇叭手としての叔父なり肺活量ずば抜けていしと聞けど還らず

道草も食いしが通学六キロを走りし マラソン常に優勝

秋の山のフレップは熊の好物で出会わぬように取りに行きなき

野苺は母への土産ブラウスのポケット赤に染まれど夢中

麦畑は我らの遊び場大口を開けし雲雀の子にジュースつく

シンガールのミシン買うとて三十台全部試して母は選びき

ストーブに不発弾乗せし男の子指の全部と共に爆発

引き揚船待つ間もソ連の兵が来て山火事消す者連行しにき

おこげでも良いからと言いあしたから来るひとありき皆好きなのに

農作業の父のかたわらドブに落ち汚れ落とすに裸ゴシゴシ

生まれつき我は大きく兄小さし口のことなり食いっぱぐれなし

樺太でのこと

私の家にドロボーが入った。戦後の樺太で二人組のロシア兵であった。

母が「ドロボー」と叫んだので、八畳間で大の字になって寝ていた私はぼっと起きようとしたが、寝ていた布団の上の山のように物が積まれていて出られなかった。でも六歳の私は見た。ロシア兵の一人が赤い布を鉢巻きにして縁側から出て行く姿をはっきり目にしたのです。

敗戦国の日本は弱い立場です。うちは家族が多いので住宅を二戸分使っていました。ところが突然若い夫婦がやって来て今日からここを使うと言われ明け渡す事になりました。言葉も通じず怖がっていました。それ程悪い人達ではありませんでした。ドロボーは悪い奴ですが、ズーゾーしくも母の大事なミシンまで盗んでいこうと縁側まで持ち出していたのです。

ロシア兵は兵隊帽を残していったので、訴えれば犯人は見つかった筈。でもしなかった。裁判にでもなったら時間がかかる。帰国の為いつ許可が出て良いように荷造りはバッチリの態勢で固唾を呑んで待っているのです。皆は口を揃えて「一子はお寝坊さんで助かったね」と。

◆今月の二人・大下陽志江品評◆
春彼岸夫と二人で

大下さんは、広島県廿日市市在住。結婚してからの日々を振り返っての一連十三首である。

・鯉のほりみ空に浮かび初孫の義父の自慢でゆうゆう泳ぐ
長男誕生。初孫の誕生を喜んだ婚家の父上は、きつと鯉のほりに奮発したことだろう。鯉のほりがゆうゆうと泳ぐのは、「義父の初孫自慢」そのままの姿であるようだ。

・木洩れ日のおわき光のさす窓辺わが子の頬にそつと触れみる
「木洩れ日」「あわき光」「窓辺」、そこにいる母子。聖母子像でも見るような美しい光景だ。母になった日の喜びは、今そんなふうに戻想されているのかもしれない。現在形で詠われているのだけだ。

・しんしんと雪の降る日に生まれたる双子の声の高らかなりき
長男に続く、双子の男子の誕生。雪の降る日の静けさと、双子の高らかな産声。対比の中に誕生の喜びが強調されている。

・突然に心臓止まりて病院へ未成年の子 今親となる
男子三人の子育ては大変だったと思うが、大下さんはそれには触れない。だが、「突然に心臓止まりて病院へ」という出来事は忘れることのできないことだったのだろう。その時の驚きや心配はいかばかりだったか。それもこの歌では「そんなこともあったけれど、その子も今は親になってね」と語っている。

・春彼岸夫と二人で参る墓そばにはつくしの頭がのぞく
夫と二人で、春の彼岸の墓参り。子育ても無事に終えての、やすらぎもあることだろう。傍らの土筆にも目を留めて、夫婦の間にはゆったりとした時間が流れているようだ。

◆今月の二人・平山一子作品評◆
肺活量ずば抜けて

評者・久我田鶴子

鏡子にお住まいの平山さんは、八十一歳。樺太で幼い頃を過ごし、戦後、家族と共に引き揚げてこられたようだ。

・樺太の小学校の空襲跡二回に分けての朝礼なりき
戦中の樺太にあったの、小学生。空襲に遭っても、その跡で朝礼は行われていたのだった。二回に分けて行われたのは、残された朝礼の場には全員が入りきれなかったということか。
・喇叭手としての叔父なり肺活量ずば抜けていしと聞けど還らず
前の歌からすると、二十九歳で叔父は喇叭手として出征し、戦死されたらしい。肺活量がずば抜けていたと人づてに聞くのみの叔父。「聞けど還らず」に万感が籠もる。

・野苺は母への土産ブラウスのポケット赤に染まれど夢中
樺太の自然の中で遊んだ記憶は、平山さんの中に今も鮮明である。野苺を夢中で摘んでブラウスのポケットを真っ赤にしたことも、熊に出会わないかとドキドキしながらフレップ（コケモモの実）を摘んだことも、昨日のことのように楽しげだ。

・シンガールのミシン買うとて三十台全部試して母は選びき
シンガールのミシンを買うことは、お母さんにとって大変なことだったに違いない。それにしても、三十台全部試してみたとは凄い。具体が読者を唸らせる。

・生まれつき我は大きく兄小さし口のことなり食いっぱぐれなし
なぞなぞのような歌で、リズムカル。そして、結句の「食いっぱぐれなし」。この明るさとユーモアの感覚、素晴らしい。

平成の時代に入って間もなく、昭和三十三年から三十余年の間続けたきた商いを閉じた頃に、明石多美子様の着付け教室に通っておられた東原登美枝様から「短歌教室に行ってみない」と、声をかけられました。そのころは時間に追われることもなく深い虚脱感で一ぱいでした。

まもなく、軽い気持ちで須磨離宮日本庭園和室での集まりを見学させて頂くことになり席に着くと十四首の詠草が配られ、一首目の歌「すくすく育ちし孫の運動会かっこ得意は息子にそっくり」のお歌でした。この一首に、小学生の頃の息子を思い出して、私も孫のことなら作れるかも、と心の奥で感じたかもしれない。丁度、初孫が生まれて訪ねてくれる日を心待ちにしていたころでもありました。

その後、明石様のお勧めで短歌教室に参加させて頂くようになりました。数人の方々との勉強は事前に作った歌を持参して一首ごとに丁寧にわかるように添削をして下さいました。ある時、

・ぶらぶらになることありてわが孫の斎藤
茂一路上をあるく 斎藤 茂吉

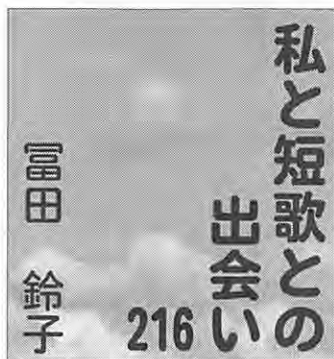
「ふりふり」でなく「ふらふら」でもなく「ぶらぶらになることありて」に孫を見ている作者の心のあたたかさが、じんと伝

わるのを覚えました。

それ以来、よちよち歩きの幼い子を見るたびに、この歌をくちずさんでいます。

短歌とは無縁でしたが、言葉の力に惹かれるようになり明石様のご配慮で「地中海」に入会させて頂きました。

月例会会は大坂支社。その頃は、奥田清和氏はじめ田土成彦氏、浜田昭則氏、と個



性豊かな先生方に御指導を受けました。

しばらくして「地中海」代表香川進先生が大坂支社の例会において下さいました。

きりっとされたお姿に時々笑みをうかべられるお顔に親近感をいただきました。参加者の詠草に批評と添削を賜り、私もその時の情景を訊かれ言葉を選ぶことと調べをととのえるようにと教わり、添削をして頂きま

したことは夢のようでした。

平成七年に、阪神淡路大震災に遭い、ふるさと淡路島に戻って間もなく両親の死。

父は出征を体験し、その後は農業ひとすじで、生涯病むこともなくこの世を去りました。母は、施設に十余年間お世話になりました。

十九歳で父のもとへと旅立ちました。母の死後四年して今度は夫との別れ。一

昨年のことになります。夫は故郷での野菜作りの夢が叶い、二十余年充実した生活だったと思います。今も亡くなったとは思えず不思議な気持ちのまま、一年半が過ぎようとしています。

歌会欠席の時に送って下さった寄せ書きに、励ましのお言葉があり、背中を押されて歌会に再び参加することが出来ました。

私と短歌との出会いは、まさに歌を通して宝物と言うべき、多くの仲間を知り得たこと。心より感謝しています。先生のご指導のもと日常の属目の中に詩を見つけることを心掛けたく思っています。

・夜独り泣きたくなりて暫し泣く涙は心少し軽くす 笹島 敬子

胸があつくなり自然と涙がでてきます。雪の上にいである月が戦死者の靴の裏紙を照らしはじめつ 香川 進

父を偲ぶとき忘れられない一首です。